

ものを獲得しているのかについて、断片的な知識しか持ち合わせていませんでした。こひつじ保育園での一歳児以上の年齢の子どもたちの音楽行動に関するこれまでの観察研究が、子どもたちの話す行為に深く根づいていたことから考えて、言葉をまだ獲得していない乳児期の子どもに際立った音楽行動を見出すのは難しいのではないかと想像されましたが、まずは、○歳児クラスの子どものうちについても年長児同様に「子どもたちが日常生活の場面場面で生じる情動を、呼吸を整え、言葉の音響面をまとめてどのように音楽的な声と動作に作り上げているか」という視点で観察を始めることになりました。ただし、「言葉の音響面をまとめて」の部分は、この年齢の子どもたちが言葉を獲得する前段階であることから、「音声をまとめて」とすることにしました。

観察を始めた第一日目から、○歳児クラスの子ど

もたちの生活が、私たちの予想をはるかに上まわって、実に音楽的であることを目のあたりにすることになりました。生後三カ月のひろきくんから、生後十二カ月のしおりちゃんまで、○歳児クラス十二名の子どもたちは、月齢の違いにかかわらず、それぞれに驚くべき好奇心と集中力で周囲の音や音楽と関わっていました。子どもたちは、目覚めている時はいつとも、感覚器官のすべてを働かせて外界をたゆまなく探索していると感じさせられました。このような子どもたちの活動の中に、どのような音楽行動の芽生えがあるのかを明らかにするために、私たちは、何らかのまとまりの感じられる子どもたちの声と運動動作のすべてに注目して観察を行うことにしました。が、子どもたち



の声と動きの活動は、聞くこと、触れること、口に入れることなどと深く関わっていて、声だけ、動きだけの活動を取り出すことは、不可能であったために、結局は、午前中二時間の観察期間中の子どもたちの行動とそれが生じた状況のほとんどすべてを音楽行動に関わるものとして記録することになりました。

四月から十月までの六ヶ月、二十一日間にわたって続けられた観察の記録は、子どもたちが周囲の音や音楽にどのように関わり、次第にそれらの音響を組織づけるようになるかをドラマチックに物語るものとなりました。子どもたちが保育室で、砂場で、プール遊びで繰り返される活動は、どの場面を取り出しても、音楽的な熱中と解放感、そして心地良さに満ちたものでした。今回は、保育室での子どもたちの音と音楽へのかかわり方を記録の中から取り出して考察してみたいと思います。

興味を持つ―集中して見る、聞く―動作する

一九九七年五月十九日

小雨が降っていて、今日は朝から室内遊びになりました。このところ曇り日が続いていて、しばらく外遊びができないでいたせいか、子どもたちはむずかり気味です。それでも、給食を済ませると、落ち着いた表情になり、三人の保育者たちに見守られて、思い思いに活動を始めました。

おもむつを取り替えたあと、保育者は、ひできくん（九ヶ月）をテーブル付の椅子に座らせ、真ん中を押すと、キュッキュッと鳴るおもちゃのタンバリンをテーブルの上において、人指し指でつついて見せました。保育者が音を出すのをじっと見つめていたひできくんは、今度は自分で音を出すことを試し始めました。右手でタンバリンを押さえて、左の手のひらで叩いたり、両手で持って、ひっくり返してみ

たり、周りについている鈴をじっと見つめて、右手と左手の人さし指でなぞったり、鈴の部分の口に入れたり、熱心におもちゃとかかわります。この行動は、おもちゃを椅子から落としてしまうまで、約九分間も続きました。おもちゃを落としたときは足下を覗き込んで「We, E.」と声^注をあげ、べそをかきました。もっともこのおもちゃとかかわっていませんでした。

ひできくんは、タンバリンを腕全体で打ちおろして、三回から六回、続けて打つことを繰り返しました。手のひらでタンバリンを打つことによって作り出される音に、聞き耳をたてているようでした。六回続けて打ったあと、腕の動きをとめて「A, he.」と図1のように声を上げました。息をつめて長く打ったあと、ほっと息を抜くかのような発声で、何とも間の良い、バランスのとれた動作と声のましまりを作り出していました。

たいしくん（十二ヵ月）は、一人で立ち上がったり、歩いたりできるようになり、歩きまわって、自分の世界を広げるのが楽しくて仕方がないようです。保育者が投げたボールを追って、すべり台を逆

図1

ひできくん
タンバリンを
左手で打つ



図2

たいしくん
タンバリンで
口をふさぐ

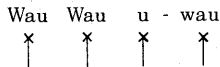
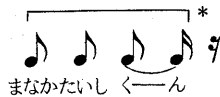


図3

保育者が
呼びかける



*は呼吸周期を示す

さに這い上がったり、座って、そのまま両足を動かしてすべり降りたり、床に座り込んであたりを見まわし、何か面白いことがないかとじつくり探したりします。

たいしくんも、おもちゃのタンバリンに大いに関心を示しました。しゅんたくん(十一月)が持っていたタンバリンを取り上げて、タンバリンを左手に持って、右手を大きく振り上げて、しっかりと六回打ち、次にタンバリンを右手に持ちかえて、今度は左手で弱く三回打ちました。そしてこのあと、タンバリンを両手で持って口を塞いだり離したりしながら、「Wau, Wau, u-wau」(図2)と発声しました。

やがて、保育者が子どもたちの名前を呼び始めました。「まなかたいしくん」(図3)と名前を呼ばれると、たいしくんは、とても嬉しそうな表情で両手を打ち合わせながら(三回)、呼びかけた保育者

の方へと歩いてゆきます。もう一度繰り返して名前を呼ばれると、今度はもっと嬉しそうに、手を二回打ち合わせて、腰を屈めてお辞儀をしました。

このあと、柵をへだてた隣の保育室の保育者に向かって、だっこをしてほしいとせがんでむずかりましたが、保育者が柵の下の方に顔を隠して「いい、いい、バア」をすると、二回目の「バア」で、保育者の顔をじつと見て「Aha, aha」と笑い、これを三回行ううちに、すっかり機嫌がよくなりました。保育者が「いない、いない、バーはしおりちゃんと一緒にやったもんね」と話しかけると、タイミングよく「Ai」と答えました。

☆ひできくんと、たいしくんの活動をとりだしてみました。二人とも周囲の人々の行動や、周囲にあるモノに対して、驚くほどの関心を示していることがわかります。興味のあることを見つけると、まず、じつとそれを見つめ、次に自

分の身体を使ってそれにかかわるのです。声を出してみたり、触ってみたり、叩いてみたり、振ってみたり、いろいろに試みるうちに、次第に声と動作を組み合わせたまとまりのある行動を作り出します。

この日の二人は、タンバリンやおもちゃ、そして滑り台など、身辺にあるモノを叩くという動作が目立ちました。繰り返し叩くことによつて、等拍のリズム打ちが生まれていました。非常に印象的であったのは、子どもたちがこのような動作を行う時、それによって生じる音に耳を傾けていること、音を聞くことによつて運動動作の調整を試みていることでした。たいしくんは、保育者が唱える「いない、いない、バー」に集中するときは、保育者の口元を、タンバリンを鳴らす時は音がする部分を、目をこらして見つめ、耳を澄まして声を音を聞いてい

ました。

呼吸を整え声と動作のバランスをとる

一九九七年六月十日

昨日の雨があがって、陽ざしも暖かいので朝の散歩に出かけることになりました。

たいしくん（十二ヵ月）と、しおりちゃん（十ヵ月）は歩いて、ほかの子どもたちは四人乗りのバギーに乗って保育園の近くの並木道をお散歩です。しおりちゃんは、皆と離れて、しっかりした足取りで、どンドン歩きます。通りかかった近所のおばさんがしゃがんで「しおりちゃん」と呼びかけて、手を叩くと、おばさんの方へ向かって急いで歩いてゆきました。たいしくんは、ご機嫌が悪く、ほとんど保育者にだっ



こされてのお散歩になりました。

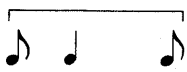
給食のあと、今日は八名の子どもたちが、保育室で自由活動です。

ひろきくん（四ヵ月）は、うつ伏せになって、両手をふんばって頭をあげ、両足を屈伸させて、懸命にはいはいの練習をしています。まだ前には進みません。保育者が「疲れてきたかな？」といって抱き上げるまでの約六分間、飽くことなくこの活動を続けました。しゅんたくん（十二ヵ月）は、青いプラスチックの輪を持って、あちこちに打ちつけて音をたてたり、隣の一歳児クラスから聞こえてきた「むすんでひらいて」の歌に合わせるかのように、両手を上げて上下に振ったり、輪を左手、右手に持ちかえて振ってみたり、口にくわえたり、畳にうちつけたり（十五回）大活躍。まなみちゃん（九ヵ月）は、おもちゃのタンバリンを床において、まず右手で打ち、次にタンバリンをひっくり返して、今度は

左手で打つことを繰り返す、のように、どの子どももじっとしていません。

たいしくんは、周囲の状況変化や音にとっても敏感です。ひできくん（九ヵ月）が保育者の膝の上でタンバリンを叩いているのに興味を示して、ひできくんとタンバリンのとりあいっこになりましたが、結局手に入れて打ち始めました。左手にタンバリンを持って、右手で十三回、次に右手に持ちかえて左手で十回、このあとタンバリンを、左手、右手と持ちかえて、何度も打ちました。しばらくタンバリン打ちに熱中したあと、ちょっとくたびれたという表情で、そばにいた保育者に向けてタンバリンをほうり出しましたが、保育者がタンバリンを床において両手で交互に打ち、次に振ってみせると、保育者の手元をじっと見つめていました。たいしくんのタンバリン打ちは、五月十九日のそれとくらべて、長く続くようになり、特に左手打ちは、しっかりした音

図 4

保育者 
 いない いな—い

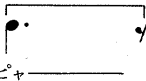
しおり 
 じゃ

図 5


保育者 
 いない いな—い いない よ— パー

図 6

保育者 
 ハイ じゃお て て パッ チン
 手を打つ

が出るようになっていました。

たいしくんは、管のついたプラスチックの空気入れもお気に入りです。これは床に置いて太鼓のように打ちますが、タンバリンは、いつも手に持って打ちます。タンバリンは手に持って打つと、周りの鈴もよく鳴るのでその音を楽しんでいるのかも知れません。

しおりちゃんは、「いない、いない、バー」が大好きです。プラスチックの赤いかごを両手に持って保育者に向かって、自分の顔を出したり、隠したり、無言で「いない、いない、バー」を繰り返しています。保育者もそれに表情だけで答えています。別の保育者が「しおりちゃん、いない、いない、バー、やって」と声をかけると、立ち上がってその保育者のところへ行って、保育者が唱える「いない、いない」の間、かごで自分の顔を隠し、次に、図 4 のように見事なタイミングで「じゃー」といっ

てかごを振り降ろして顔を出しました。保育者の唱えた二回目の「いない、いない」に、しおりちゃん、保育者と息を合わせることができず応答がずれてしまったので、今度は保育者がかごを持って、自分の顔を隠して、ゆっくりと「いないいない、いやー、バー」(図5)と唱えましたが、しおりちゃんと、そばにいた、たいしくんは、揃って保育者の顔をじっと見つめているだけでした。

☆乳児の行動は、一見したところ、手あたり次第に何か試みているように見えますが、実際はそうではなく、何か行動を起こす前に、自分の目や耳でしっかりと状況を確かめて、自ら行動を起こすために準備していることがわかります。

保育者が毎日必ず給食の前のお祈りの際に唱える「ハイ、じゃ、おてて、パッチン」(図6)の声を動作を、子どもたちは、全身で注目しています。そして次第に「パッチン」の「チン」

で両手を合わせることができるようになるので

☆しおりちゃんは、この日の「いない、いない、

バー」で、保育者の「いない、いない」の呼吸の長さと同調を感じて、保育者の「バー」に声と動作を一致させて唱和しましたが、そのあとにゆっくり唱えられた「いないいない、いやー、バー」は、「いないいやー」が入ったために、これまでの呼吸のとり方と違ってしまっただけで、行動を起こすことができなくなり、もっぱら保育者の行動を注目することに留まりました。

☆しゅんたくんは「むすんでひらいて」の歌を聞き分けているようです。二週間前の五月十日、年長クラスの子どもたちのお誕生会で、子どもたちが歌い、動作する「むすんでひらいて」



を、バギーに乗って、テラスから熱心に見学しました。歌には合っていないものの、手をたたいたり、両手を上げたりを試み、楽しんでいました。今日は、隣の部屋から聞こえてきた「むすんでひらいて」の歌声に、一瞬、耳をそばだてるような表情をして、嬉しそうに両手を上げて上下に振りました。

○歳児クラスの子どもたちの日常の生活を、子どもの側から見つめていますと、私たちの周囲にはこんなにも豊かな音の世界があったのかと、あらためて思い知らされ、感動します。

次回、プール遊びでの子どもたちの音楽的な熱中を取り上げることしましょう。

(国立音楽大学)

注

1筆者と国立音楽大学幼児教育専攻卒業研究グループは、東京都東大和市にあるこひつじ保育園の子どもたちの音楽行動の継続研究を一九九一年から現在まで七年間にわたって行っています。一九九七年度は、筆者と国立音楽大学幼児教育専攻四年の西本倫子、安森祐子が観察を行いました。

2今回の調査では、泣き声については取り上げないことにしました。

3本稿では、喃語の発声音をできるだけわかりやすく示すために、ローマ字表記を採用しました。